

倉田良成

詩集『歩行に関する仮説的なノート』から



倉田良成氏（1953 年～ ）

目次

序	2
第一のノート（歩行への限定）	2
第二のノート（歩行）	6
第三のノート（自註）	12
後記〈読者へ〉	17
著者略歴	17

序

風景……。すなわち自身が措かれた場、その色調、形姿、光り、匂い、音響、それらが無制限に、全く任意の方向へと拡がりもはやおのれ自体ではいられなくなるような、ある極めて個性的な〈総体〉……風景は、受感されたその場に通常〈感興〉と称せられるところのある種の像をむすぶものではないだろう。時差。というよりも、より包括的な構造であらわれるような単なる異差の、単なる普遍性があるだけだ。風景……。だが、かかることがらの細密な透視図を引くのは止めにしよう。わたしはそのとき、そこに、そのようにあつた……のみだ。

対象はつねにわたしから滑りゆく、時間としても、空間としても、いなその全体。そして心象とはわたしから最も唐突に滑りゆくある特殊なもの、そのものを謂う。たとえばいまはげしい寒色系の心象が不意に、握られた果実の截面のようにしたたる。それがすなわちそのまま〈あの時〉にほかならず、他のかたちでは存しようがないことに、たたく対象の対象である所以がある。過去も現在も触れることのできない堅固な虚数のごときもの……わたしは解くことも不可能ならば受感することかなわぬ一定の不能さのただなかに措かれていた。かくてわたしは夕暮から夜にわたる時刻を不思議な熱意に駈られながら歩んだのであつた。

第一のノート（歩行への限定）

部屋から風景へ。

風景から部屋へ。

このふたつは可逆である。わたしはあらゆる室内にわたしの歩行の足跡をしるしてきたしまたあらゆる風景はただひとつのうごかぬそしてまるで生きもののようにそれじたいで思考するくらい空間に還元された。

幾つかの識知からの報告……。

現象を汲みあげるおりに生じる二者分極の作用。あるいはまた分極された二者の総合統一の不可能性。これらにはつねにわたしの一挙一動にまつわる極度に固有な、したがって伝

達不可能な感覚、ことばとわたしを隔てるあたかも夢魔のような実在感、つまりわたしの在りかた、わたしのそのものにとつて端初的な、了解の不可能性の介在が存するようにおもわれる。かかる〈夢魔〉はしかしわたしのものでなく人間のものであり全てのひとの所有ではあるが、けして直接の回路に依つては伝達しえぬ、それに依つて引かれた描線に血と肉を生々しくさせるところの、なにびとも否むことの赦されぬ感覚である。わたしはこれを〈特殊〉として措く。関係のなかのわたしや関係のそとのわたしや、以下無限につづくだだひとりのわたしがするすべてのおこないには、この〈特殊〉の跡が引かれており、それに依つてあらゆる時間、すべての空間からはずれた地点でわたしはたまたれ、かつほろぶ。

幾つかの識知からの報告……。

ひとはそれぞれに固有な領域を占有する。かれはその領域の圍繞をけして越えることをしない。いな、かれがどのように自身に付された領域の刻印をかんじ、かつそれをいかように見定めようと、それどころかかかる領域を踏み越した、とかんがえるその瞬間でさえかれは自身の圍繞を〈出よう〉などとは〈かんがえる〉ことさえおよばぬ。(わたしはわたしを仮定することに依つてのみ生きる)。おそらくわたしの非人称は、わたしが斃れたのち、かつてわたしであった領域に、極めてわずかな充填物と、筋ばったいく枝もの隆起のごとき痕跡を視ることができる。

幾つかの識知からの報告……。

およそ対象は、わたしが把むそれとはまったくことなつた本性に依つて〈そのように〉存する。〈そのもの〉。わたしがおこないうることは、ただかかる対象が世界の唯中に置かれたときにいずれにせよ、何者かで在らざるをえないところのその作用面、その領域を指示す、というおこないに限定された。

幾つかの識知からの報告……。

実在のさなかでのすべての行為、対象、感受は、くわだてられた直接の標的からはずれてゆく、ある錯綜した必然を有している。その作用形式、つまりそれらに介在する曲折や重層そのものだけが指標とされる。かかる指標を視てはならない、視られてはならない。関係の枝の狭間に成熟するあのものをおもう。そしてわたしはついにあのものに依つておもわれる像にすぎなくなるまでに到る。

幾つかの識知からの報告……。

わたしが依然として告知を待ちのぞんでいたのは、世界とわたしとのあいだに存するある構造、すなわちわたしがする作用のいつさいの対象であるべき世界と、かかる対象の総和からはけして演繹されないわたしの位置に就いての関係性それ自体であった。わたしと世界の両者はそれぞれに、範疇を交換しつづいまだ可逆であり、世界はわたしに還元され、わたしは世界に循環され、このような異差、連繫、かくて飛躍……。けれどもかかる識知はすでに語られてしまえばいっぽうでは観念論へ、他方では生理学へ相接してゆく排中律である。

わたしが希っていたのは、整序された定式でもなく、だんじて表現のすべでもない、ただわたしがゆきつくべき限界の相であり、修辞や逆説によって解かれることのない、ひとつの直截な領域である。

わたしは現在、幾つかの視点を設ける。視点はおそらくは相互にわたしが直視することのできぬある脈絡に沿って結びあい、ひとつの基底の全体……わたしの身を据えるべき視座をかたちづくる。もろもろの解明がおこなわれるにせよ、おこなわれないにせよ、何ごとか意味あるものがやって来るのはこの後であるだろう。

世界は量の全体である。

しかし世界が世界として、つまりはそれ自体として対象化されるとき、世界は一の質である。

かかる二律背反を矛盾として把えるならば、ここにひとつの内容を認めることができる。

だがこの二律を排中律として視るのならば、世界は無限数の作用とその形式へ解体される。

この立場からは……

世界が量に還元されるとき世界とは方法であり……

世界が質に還元されるとき世界とは状態である。

ここにいたって状態と方法とはひとつの主体の裡で合致する。すなわち、その両者は世界の裡の主体がとるひとつの態度にむかつて収斂される。

このようにとらえられた世界の中の主体において方法は、状態の水位を決定するばあいにもつとも原形的なすがたであらわれるのみである。

かかる主体にとって判断の基準は次の諸点に限定される。

了解可能性……

事象の意味を理解しうることである。

了解不可能性……

事象の意味を理解しえないことである。

了承……

事象の意義を認めることである。

反了承……

事象の意義を認めないことである。

非了承……

事象に対する判断の基準を有しないことである。

ある種の表象をわたしよりも前のほうへ投ずることによってわたしがすすみうる實在の野……。わたしは了解の可能性に染められた、つまりは世界の実在に依つて了承された、一定の地帯をゆくことができる。わたしは語ること一般に就いて言っている。ここで、了解の不可能性はむしろ反了承というかたちで枠をあたえられ孤立させられ了解可能性によって埋めつくされる、つまり了承される。かかる機構のうちに、そのなかでひとびとが言葉をむすびあっている現実の貪婪な意志をみとめるのなら、わたしはわたし自身の意志をもつことでわたしの実存している場処よりも前にゆこうとするあらゆる表象を放棄せねばならなかった。わたしはわたし自身よりも前にはすすみえず、かつすすまないことを選択した。

世界は限定されることで、すなわち部分となることに依つて具体化される。すべての実践のうちに核のように蔵したもたれている表象はそれゆえ部分にほかならない。

わたしは世界のあらゆる部分に全体という表象をしかみつけることができなかった。そのようにわたしが有する唯一の表象である全体は、それがまぎれもない全体であらなければならない由來に依つて、極度に不能なものであるべきであった。

わたしはわたしを仮定する。わたしの仮定を明瞭に記すことに依り、仮定されたわたし以外の現実を信じないこと。世界を凍結させること。

フィジカルな事象におけるあつれきに対して意識的であること。意識の象はそれがいかに微細な波紋であるにせよ、これを把えてきわだたせること。

わたしの内部の^{なか}、意味づけられたり位置をあたえられたりするものない数多の固定観念やオブセクションを、むしろそのままのかたちで確定の方向にむかわしめること。

世界に対する固有な斜視……。

(けれどもわたしはいつかわたし以外のものにむかつて語りはじめだろう。かかるときいまさらのようにわたしがただひとりで在ることに驚かされるだろう。)

第二のノート（歩行）

切断することが重要である。いま、それはわたしがする歩行の純粹さ、のみではなくてわたしの生理、視線、実在非在それらいつさいによって編みあげられたわたしの存在そのものの形態としてみつめられるべきである。切断とはこのばあいわたしの意識をあたかも素手で触れ、とらえうる〈もの〉とみなすことによって可能な、自身の存在そのものの完全ないわけ―区角の謂いであり、わたしのうちのさまざまな領域の定立……不動なものとすること、逆言するとすれば〈中間項〉を無くしてしまうこと、もしくは多少感情を加味すれば、それを、ころしてしまうことの謂いである。

截断すること。わたしが眼前に見さだめうる歩行のための当為は、わたしがする歩行の原体である、ひとと交換不能な固有……わたしの〈有機〉そのものからの過剰をつぎつぎにあまざず截断してゆくことである。いな、ひとつひとつの截断がそのままわたしの足どり、わたしの眼で視ることができる足どりのさまを形づくるようにおもわれた。過剰な眼はわたしにとってかならず、外象のいろを込めているものであったから、それを切り落してゆくことはあまたの外象とわたしとの関係性、その相関の線を無くしてしまうことあるいは外象との骨がらみの交流にひとつの〈異層〉をめぐるること、でありそのようなしてわたしそのもののもつとも原的な骨格がこのこれあたうかぎり純粹な固有度がはかられるはずだ、と信憑された。わたしにたいするわたしの絶対的な場処の確保……それゆえ、過去―現在―未来という時間系は否認され〈いま〉・〈ここ〉のほかはわたしにとって存在してはならなかった。

わたしが受感する多様な〈予感〉……いなむしろ個々の事象を超えて〈総体〉として、また一種の色相としてわたしと相関しつづける〈予感〉―かくしてわたしがする歩行のいつさいの前提としてのそれ……。個々の事象に即した予感ほみな、ある〈総体〉つまりわたしの原形質へと回歸してゆく。予感とはかかる意味でわたしの存在そのもの……いまとここ、に關して云えばわたしの、位置づけ定立しないこと、それ自体が唯一の表徴である領域と独特な触れあいかたを示している。それは〈可能〉にむけてひらきつくされたわたしの〈全体〉あるいはわたしの〈全身〉である。かかるばあい、予感ほ全可能、性というすがたでしか存せず、喩えそれが一の可能に照射されているにせよ、一の具体物がじつさいにひらかれることはけつしてない。けれどもそれが全可能の意識、感情であるにせよ、この予感がある場処にとどまっているかぎりで〈いま〉・〈ここ〉に存するわたしは〈何等かのかたち〉ですすみうる……このようないま、このようなここに存するわたしが想定、むしろ断定するほかはない唯一のすすみかたである、とおもわれた。

わたしが〈いま〉・〈ここ〉で把まえているあらゆる言葉はわたしが坐している抽象的な椅子……そのような原理の根拠としての非―定立の座からあみうたれたものであるからどのような直接性も具体性も喚起することはない……つまりそのようなわたしは現実、その

有効―無効が問われる層へは上昇あるいは下降しないことを意識的に選択する。たいせつなことはもろもろの言葉がわたしの表皮にもはや痕跡をのこすことなくぬぐい去られてのちわたしが視る自身の真皮のありさまである。《言葉》の度合いは有償性と関連させて計ることができない。わたしがする表象作用をもふくませた意味合いでの言葉と、わたしがひそかに狙うわたしの全体の言葉をつなぐ意識線へは幾重もの断面屈折をつけておけ。(いま書いたことがらさえもわたしがする曲折のなかに組み入れること) 視ているわたしは有機そのもの視られているわたしは無機そのものといった場処を確保せねばならないとおもわれた。

かくてわたしはそのようにしてひらかれた予行……なにものへもむかうことをしないあるいはなにものかへむかつてする予行の地平をさまざまに遍歴しうると信ぜられた。

わたしが措かれている世界は、措かれているわたしがそれを視るとき、あらゆる事象は対称可能であり相互にどのように唐突なくみあわせであろうと類推されえかさねあわせうる。これは、世界の全体性といったことがらよりもかかることがらが強迫的なまでに《可能》なわたしの、非―定立のもんだいに帰せられるべきであった。わたし自身の《感受》によって触れうる対象のいつさい……世界は、ある一定の色系にそめぬかれかつわたしのさまざまな屈折うじきの方位にしたがつて色相もさまざまに系列化されて世界を浸潤・構成してしまい、ついにわたしにとつて世界とは対象のすべてにみちゆきわたるひとつの色彩のほかいかなる意味も有することはなかった。

わたしは世界にたいして無数の仮説をはばたかせてゆくことができた。そしておそろしい空のひとみのように拡がる《可能》にみつめられてそれだけがわたしに赦された唯一のおこないであった。

わたしが内蔵する《可能》……というより視準をしぼろうとすれば無限に後景にしりぞいてゆく、いわば自―意識の逆望遠鏡の内部なかにひらけて見える地平としての《可能》はそれそのものが実現されることはないけれどまたそのことは知り尽くされてはいるのだけれど、わたしの描いてきた軌跡の曲折、《なにものか》のそのときどきにおける実現の度合いその重層―堆積のさま等とある対応をなしかつそれらにある作用を及ぼしていることはあきらかであると言ふことができた。わたしの《可能》の地平はなにものをも指し示すことがないそのことが、かかる地平の存する前提本質であるのだが《なにものか》へむかつてなされる実現はわたしの自―意識の逆望遠鏡の内部なかでそれそのものとして拡がりあるいはせばまる固有の地平のうごきにある仕方で厳格に根づけられて実現されまた実現されない―といったけして眼前にひきよせることのできぬ回路が存在するようにおもわれた。

とまれ、いま・ここという地点に固着しているわたしからあらゆる方向へ派生してゆく

意識の投射がそれ自体極めて意識的になされることのうちには、すなわちかかる派生の主体の軸にはわたしの全体をそのアルファ・オメガまで非在の地点で固有な自律によって再構成するあるいは、非在の地点にむかつてわたしの全体を編みあげてゆく、といった願望……わたしがする仮定の領域ではなくむしろその仮定じたいにある不可解な仕方では有機づけている〈感受〉の領域に帰属せしめらるべき願望・欲求が内在し、煮詰められているようにおもわれた。さればこそわたしのいま・ここへの執しかたはつよいのであると信ぜられる。そこには自身をひとつの感受体と限定しきってしまうことの基底としてのいうなれば〈そと〉——つまりは〈時間〉にたいするほとんど過剰ともいえるほどのおそれがぬり込められているようにさえおもわれるのであった。

けれどもわたしを包围するあの〈時間〉への不安はたえまなく意識されることでつまりたえまなくわたしを限り照射し穿ちつづけることでむしろわたしの内部の全体を構成する〈要素〉という側面からは他のさまざまな重層ともはや判別しえぬまでに固有——有機化されていた。それゆえ、かかる〈不安〉にあつては〈時間〉という相貌はわたし固有のあの基底である不安性全般のうちに融化してしまいむしろいままではわたしの歩行の欠くべからざる部分となつてしまつていた〈不安性〉をそのときどきの要請に応じて喚起せしめるためのいわば索引として〈時間〉ということばあるいは表象をもちいる——といった不思議な転回がおこなわれていた。この地点にいたつてわたしは自身の不安のさまを包围といったばくぜんとした表現ではなくしてわたしをつよくあきらかに囲繞するものとして限定すべきであるとおもつた。不安を囲繞としてかぎることではかかる不安を逆囲繞しかつ意識的に〈不安〉をわたしみずからの機能として内部に有機づけ使役しうるまでにしたいとおもつた。このことはいつてみれば外部からするわたしへの作用のことごとくを単に〈自然〉の当然さということでは承せすぎやくにわたしの固有さによつてさまざまに変容せしめもつてわたしの〈自然〉となす——といったわたしが蔵しもつある体系の要請、というよりもその烈しい欲求によるとうぜんの侵行であるということが出来る。

わたしがする感受のうつわのうちで刻々生起と消滅をくりかえしているあまたの、形而上学への予感というすがたであらわれるむしろ論理には徹して収束されてゆきえない〈可能〉の原液に充たされた胚腫のことごとくをわたしの歩行を決定しているあの可能性の領野へあたうかぎりちかづけ触れさせ根づけ……つまりわたしの〈有機〉の血脈をかよわせつつ生かしてゆかなくてはならないとおもわれた。それらを要すれば〈怪物観念〉化することでありそれらが培養されるべきある独特な色相をもつたあらたな意識の層を強制的に形成することである。かくてわたしのいつさいはかかる層に抛らしめられなければならない〈そと〉との作用の線をみずから断ち切つて不能となり〈うち〉に蔵しかつ持続させる堅牢な〈可能〉の囲繞のもとにあつて自身のあゆみをすすめてゆくと信じなければならなかった。

わたしがつづけている感受の対象はむしろ感受するわたしの眼から逆照射された面のみ

で組成される世界、受感するわたしの視線だけで織りなされた〈外部〉でなければならぬはずであった。けつきよく……わたしの受感がさまざまに照らし出すものあるいは受感というし、かたでわたしを襲うものはまさしくわたしの全体がよびおこすわたしそのものであらねばならないはずであった。それゆえ私の〈不安〉——感受のわたしにおける全体化をはばむ〈不安〉の綾目はわたしからは由来しないものがわたしにする見知ることのなしいある〈外部〉の作用の相にほかならないとおもわれた。

（いい換えればそれは、わたしの全体からはけつしてはたらかかけえない、いわば偶然性の分泌物として解される。わたしの感受がすなわちそのままわたしの全体となるときつまりはわたしの〈自律〉がまつとうされるときわたしはまるで偶然そのものと化したわたし自身を視ることだろう。）

あるいはぎやくに〈不安〉はわたしがする歩行によつてわたしのうちに有機——固有化された場処からの過剰や欠如の意識として受感されたもの——と把えられた。かかるときわたしは〈不安〉を〈不安〉のままわたしの歩行のいわば水準器として使用するのみである。

——体験はわたしが坐している〈いま〉・〈ここ〉からする逆行のうちに把まえるかぎりでは体験なのであつてそのときその場で体験として受感されることはありえない——このことはわたしのうちに組成されるもののある〈時間性〉に起因することがらのようにおもわれた。〈いま〉・〈ここ〉にあつてわたしは刻々体験しつつあるのだけれどもしかしわたしの眼に映ずるものは単に現象でしかなく体験そのものはそのときその場からたえまなく滑りゆきながらかつ自——意識を超えたしかたでわたしの意識性にあたえられかつ受感されるのであった。いい換えれば〈いま〉・〈ここ〉の現象は意識的であることがもはやなにもでもなくなるような圏——わたしの全体、わたしの有機へとつねに投射されることで体験の像をむすんでゆきある〈時間〉の意識として定着されるけれどそれはわたしの意識性によつて見知られることのないわたしそのもの——つまり絶対に〈いま〉・〈ここ〉というすがたでしか存しえないわたしの有機じしんによつて決せられることがらであるとおもわれた。

わたしがする歩行のうちにあつて、〈わたしが書く〉——ということは書かれたものに焦点がさだめられるのではなかった。わたし……つまりはわたしのほかのいかなるものへも還元されえぬひとつの有機が書く——そのことがたいせつなのであつて書かれたものはむしろそれそのものだけでわたしの全体であるべき歩行を触発するばね——わたしの全体の相における不安ないしは可能の意識的な使役の〈顕われ〉そのものとしてかぎられるものであるべきだった。それゆえ……〈まえ〉へ投げつけられうる表象を可能ならしめる背後の判断の体系へはけつしてゆきえずかつそれになにもものもつけくわえることをしないような地点でそれは書かれていた、いなむしろおこなわれていた。

わたしの眼がそれにむかつてみひらかれている——ということとはわたしが自身のおそらくは思考から生理までをもふくませたいみあいでの〈全体〉をそれにむかわしめているまつたき自律、すべてわたしみずからがする意識によつてくまなく充たされた全体、操作する無限……であるところの非人称のなものか——それがわたしの有機にとり込まれるときのその勢力となるものはかつてわたしの現実であつたものがほろぼされてゆくその感覚じた

いでありさらにそのように感覚するわたしをこぼみきつてゆくときの、または感覚である……とおもわれた。このようなすがたで歩みゆくわたしはしかし実は無限の後退をなしゆくものであるのだけれどこのことはわたしがみずからをむかわしめている〈それ〉がそれ自体としては全可能がそのまま全不可能と同義であるような〈なにものか〉であるのだろうか？　ぎゃくにはたして〈それ〉そのものになったわたしの眼にわたしの外象はどのように映ずるのであるのだろうか？

わたしに世界の内部^{うち}におけるひとつの位置をあたえたとすればこのようにわたしは存しそうしてわたしはわたしの位置を自身にけつして知らしめぬことですなわち〈時間〉をみとめないことでわたしの歩みを保持していた。

そしてわたしはかつてわたしのものであったもろもろの外象——全現実とともにわたしがする歩行の触媒であった〈危機〉の意識とも訣れなければならなかった。〈いま〉は危機の意識をわたしの過剰さがある不可能性にむかつてむすぶ像とみなしわたしがする歩行の圏内ではそれは、かならずころされなければならないものとした。なぜならわたしにとって定着されてしまった危機の像にはかならずあの〈外象〉へのある有償的な〈判断〉の匂いがすると感ぜられたから。

（かくてこの〈ノート〉には危機が書き込まれることはない、危機が現ずるのはわたしにとつて実在の領においてよりほかにはなくわたし自身の実在はそれを抹殺してしまうこの〈ノート〉そのものである以上わたしの実在には危機ということばはない——とわたしはこの〈ノート〉に書くことができた。）

——書くおりに認知される苦痛はわたしの固有な全体の喪失の感覚としてふまえられた——しかししたとえばそれがわたしの〈有機〉そのものの在り方のさだめであるにしても——獲得あるいは見定めることのなしえないものであるとしてもそうであるならば私は痕跡のみを残すだろう。獲得されたものの連鎖である痕跡ではなくむしろ獲得されなかったものの連鎖が獲得されえぬものを指示し描写し暗喩しつつける痕跡として。このようなとき、書くひとであるわたしが生きて自身の血をめぐらしうる圏は外氣とまじわらぬ了承されることのない〈いま〉・〈ここ〉でありたとえばこの部屋でなくてはならなかった。

わたしがするすべての活動をわたしの〈有機〉のあとづけがたい曲線に沿つてする……あるいはわたしがする思考——それをつらぬく原線をあの〈生理〉と名づけられる極度に固有な領域にまでたかめまたはしずめるということにむかつてわたしの総称はひらかれていた。意識と有機をつなぐものはわたしにあつてはぜんたいに拡張された〈いま〉つまりはわたしの内象をふりわけける〈与件〉としての時間性の消去ということになるはずであった。そのように質づけられた圏のうちでもはやわたしは仮定された実在のうえでさまざまに見つけたものを確保……時間のいろに没せしめて所有することはない——わたしがかかえる外象にむけられたあの〈倫理〉の腫瘍は切られる——〈切断〉はそのように意識されることなく——書は自在に読みきられ読み棄てられた……すべてが消去されたのち自身の、いうなれば〈熱意〉のごときものがのこればそれで良かった。

けれどもわたしがするみずからのみずからへの派生——還元——循環がとりおこなわれているかぎりわたし……という全体の総称の先端によってなされるさまざまな内象の未形のもの、の現形化——つねにわたしがわたしのうちから呼びだしうる機能あるいは「もの」としてわたしがもつさまざまな表象を明瞭に仮定することはけれども仮定されたそれらがじつさいにわたしの領において血脈をかよわせること……わたしという全体の任意のかたむきに厳密にしたがつてうごき——はたらくことはないとかんじられた。なぜならうごき——はたらくことはわたしのうちには存しない外象のものとのまじわりのほかではなく、わたしのわたしとのまじわり——循環ではないのであったから。わたしの先端がするわたしの全体への指令——は全体のうごきにとつてはひとつの単なる契機の域をでるものではないはずであるからつまりわたしがするさまざまな仮定はそれ自体では外延をもたないさまざまな契機のやくわりをはたすものであるとおもわれた。わたしにあつてはむしろ仮定されたものの活動をめざすのではなくて仮定すること、に「うごき」があるとおもわれたしまたそのような「うごき」のうちでかつてわたしの先端に依つて仮定されたものはわたしがする「仮定」——いがいの指令とはいっさいかわることなくそれぞれに固有の座を占め——かつそのようにうごき——はたらくと信ぜられた。わたしは依然としてわたしの「可能」の諸表象をつむぎつづけなくてはならなかった。

わたしが領しているこの圏にあつて「選択」とはわたしみずからがするのではなくてむしろわたしに「与えられる」というしかたでその質がみとめられるものであった……わたしにとつて全現実はとりもなおさずあるネガティヴ——その象として内部に照射されていた。自身をとじることが予感であり希求でありそれからたぶん救済であるわたしという全体……所有として蓄積としてめざされる充たすべき内容が存しない領野であるわたしはいろあいをふくまないたんなる自身をついには定型にはいたらないであろう可塑——可逆のものとして限定し去つていた。ここにいたつて「仮定」とはわたしの全体が外象にさらされることでみずからを剝離させぬようにわたしの部分をむしろ意識的に外象と接せしめるべき作用の「面」にほかならなかった。それがわたしの全体に喚びおこすものはつねに摩擦の感覚いがいのものではなかったといえる。

〈風景から部屋へ〉

〈部屋から風景へ〉

わたしはみずからが視た風景をあたかもはじめからそのように在ったかのごとくわたしというひとつの磁場にひきつけてごういんにわたしの内象のものへと帰属させる——みずからの視野を無限に固有化してゆくかたむきによつて……わたしはみずからの領海にさまざまな象をふかくしめつづけて止もうとはしない、それゆえわたしからわたしでないもののほうへ離脱したとしてそれで死んでしまわぬようなものがわたしの手からうみだされることはないはずであった。わたしにとつてみずからの蔵しもつ表象がそれだけで通用することはわたし自身の恥辱であるべきであった。けれどもわたしがかたくなに守りつづけている圏がわたしの封じられた領海からはもつとも遠い地よりやつてくるものに依つて直撃され破られるであろう刻限をわたしはかんじなくてはならない……あきらかにわたしがみとめまいとしている時刻の狭間に熟しつつある果実の象をわたしは痛みにかがやくひとつ

の腫のごときものとして受感しなければならなかった。

わたしはわたしが刻々くみあげてゆく内象の任意にえらばれた一点がそのまま〈世界〉へとつながれてゆくようなしかたで無限に拡大・拡充されうるという可鍛性に充たされることをおもった……かかる内象の可鍛性は無限に重層してゆく外部すなわちわたしではなもののいっさいの「質」を繰り込みゆくわたしが封じてきたわたしの眼の由来にひそむものであることをおもった……おそらくすべて極限的なものがそうであるようにほんとうはわたしはなにものでもない。わたしがなにものかでありうるのはただ世界の有意味性、性的にのみ拠っている……わたしにとってそれがわいぎつなものであるのならわたしはかかるわいぎつさをこそ愛しなければならぬ遠い来歴をかんじていた。

第三のノート（自註）

a

〈テーゼ〉はそれがどのようなものであろうと出された瞬間に相対化される。このことはあらゆる人間活動のある本来的な規定である。いかなる内容であれ、それ自体としてのテーゼの方向は、ひとつの〈効力〉の枠に集中するが、それを有効化せしめるためにはおおかれすくなかれ、〈信憑〉ということが不可欠な要素となる。ちょうど〈世界〉を信憑するごとくに、である。

もし虚偽を避けたいのなら、眼は出されたテーゼの内容にむかわず、テーゼが提出されるその仕方を遡行してゆけばよい。しかし、この眼のなりゆきに忠実であるならば、かかる遡行、逆行はおそらく無限になされなければならないだろう。あたかも、〈世界〉を追跡するように、である。

このようにするとき、僕はことごとく〈場処〉というものを失うだろう。〈場処〉とは判断によってあたえられるものだ。ところで〈世界〉を無限に遡行する、ということもひとつの判断によってあたえられたある〈場処〉だとしたら、判断―場処をこぼんで〈世界〉を追跡するものにとつて、それはあきらかに自己撞着である。

ここに、〈ひとが思考する〉という行為より発するある究極的な不合理性ともいふべきもの、ひるがえって言えば、ひとつの有機性、もつとも厳密な意味における〈倫理〉のようなものがあらわれているのだとおもわれる。

b

〈方法〉がつくられるためには、具象的な現実にあたうかぎりしりぞけられ、持ちうる能力それ自体が最大限に動員されなくてはならぬ。

僕が非常な努力をかたむけてつくろうとしていたのは、たんなる方法論ではなく、それによって、僕の思考、意識、感情、生理等が統御され、ある一点へと束ねられてゆくべきより有機的な方法そのものであった……。

僕にとって……方法とはかんがえられるものではなく、行なわれるものだ。そこで、僕は恢復する。

みずからを再構成したいという欲望。なぜひとつの思考は、実証され、展開されなくてはならないのか。世界は他のなものにも依ることなく、ただみずからの脳髓の重さだけで倒れなければならない。

方法はみずからを語らないはずである。なぜならそれはひとつの悪無限であるから。そこに〈行なう〉ということの持つ、沈黙の不思議な肉感性が存する。

そしてどうしても還元することのできぬものが残ったとき、それなりの遣り方で自分か時代かにかえしてやれば良い。

意識性は、厳密であろうと欲すれば欲するほど対象のうちに微細に分岐してゆき、凍てついてゆく過程をたどる。それにたいして方法性は、意識にある盲目性を強いることで、あの〈親密さ〉という運動の感覚を喚ぶ。

方法とは一種の意識の、あるいは思考する、ということの、もつとも原基的な能力の場である。意識はそれだけではいかなる〈面〉も持たず、したがって自動する構造も持たない。

方法を逆向きにたどることによって、僕のひとつのあるきわめて〈質的な〉由来といったものがあらわにされるはずである。

方法それ自体はいかなるものも絶対に対象に加えたりはしない。すなわち方法それ自体は、いつさいの〈結果〉をおもわない。したがってどのような〈結果〉もおおそれない。

〈結果〉をおもうのは〈ひと〉であって方法ではない。ここにおこる一種の切、断を注視せよ。このまぶしさは〈ひと〉あるいは方法の、述語の息の根を止めてしまうような背理性にほかならぬ。

方法は時間のなかを遍歴しながら、突如、みずからがひとつの空間のうちに顕わになっているのをかんじるだろう。

しばしば、ある絶対性をおびたニュアンスをもつてかたられる〈体験〉は、それがどのようなものであろうとも、ひとしく、単彩の〈現実〉へおしかえされるべきである。

〈根拠〉はそれがあまる目的をもつて言われたちようどその瞬間にすでに〈根拠〉ではなくなる。僕が言いうることは、ただ触れてはならぬその一点もまた〈根拠〉いがいのもの命ずるままに、ひらきつくすことに依つてかくしぬけ、ということだけだ。

どのような意味でも体験はたんに体験でしかない。それがそれ以上のものとなる、そのさきはもはやそれは体験とはかわりがない。あらゆる言葉はかかる場においてためされるべきだ。どんなことをしてこようと、それゆえ、僕はいつでも〈ここ〉からはじめることができなくてはならぬ。

ひとつのものを、そのもつとも純粹なかたちで把えるためには、そこから〈時間〉を追放しさえすれば良い。すると、把握とは、その〈現在〉で所有するということにほかならない。

それがどのように否定のいろにめられていようとも、あるものを〈美〉とかんずるかぎりには、ある〈了承〉をその感受の根底に敷いているといわなくてはならない。

〈了承〉という鍵がはずされると、〈美〉はある種の展性をあたえられる。あたえられるや否や、それはたんに〈美〉とは呼びえなくなるような地点にいたるまで、おのれを展開させて止まないだろう。かくして僕は〈美〉よりその全権をゆずりうけ、その対象が美であるにせよ、ないにせよ、なにごとか行為せねばならない。

美とは、ひとつの〈状態〉のほかのものではないのであって、おそらく固有名詞の〈美〉といったものは存在せず、あるのはただ、〈昂揚〉ということばであらわされる、精神のある種の形姿のみである。

理性も感性も信じないこと。だが理性や感性が存在するとして。僕の不信はそのように区別することではなく、区別したものに名称をあたえることに向けられている。

感性を拒否することも、反理性をさけぶことも、ひとしく、かならずしも迷妄とばかりは言いきれぬ、ひとつの迷妄のふたつの貌にすぎない……。

読書法……。

はじめて見る、ということにはある〈奇怪さ〉がつきまとう。一冊の書物が、もし〈真正〉な著者の手に成るものであるのならば、ことごとくこれを奇怪な書とみてさしつかえない。それが〈偽物〉でないとすれば、その奇怪さは終始一貫したものであるだろう。巨大な思想はつねにある端初的なものをその核として保存しており、われわれにとって〈端

初」とはつねにある奇怪さをもつてあらわれるものであるからだ。一種の〈置換〉ともいうべき操作をおこなうこと。論理学は詩のようにも読める。作家は本来的に孤りであるという究極的な視座をたえず設けておくこと。〈主義、運動といった名のもとに、あるいは多少なりともそのことに関連させて、一個の作家を判断せぬこと。

内容の豊饒さよりも、〈場〉の堅固さにむかうこと。おそらく内容は無限にかさねてゆくことができるが、その堆積にある構造をあたえるのは、ただひとつの〈場〉である。

d

実証されることのない明証とも云うべきものがある。それは、いかなる意味をも包含したところで名指されるべき〈意識〉というものの総合における一種の発光であつて、通常〈直観〉と呼ばれているところの現象である。この総合に依る発光と、個々の場面での反射とをきびしく弁別せねばならない。

A#A-A……。だがこの定式への解答は案外、易しいことなのかもしれない。僕が為すべきことのいつさいの区分け―すなわち行なうか、行なわぬか。もつとも知つてはならぬものは自己自身である。

ひとつの解釈にたいする他の解釈は、方法的な眼においてはひとつの〈発見〉となる。なぜならそこには、可能もしくは不可能という極度に〈個〉的な与件が、直接、介入しているから。

ひとつの発見を、ひとつの解釈に墮さしめぬこと。可逆の關係に捉えられていたものが、不可逆のかがやきを発するまでに、あの、〈精神〉とよばれるものの運行を持続させなければならぬ。

同質的なたんなる〈状態〉は、これに意識のひかりをあてることをせず、つねに〈忘れていく〉べきだ。そうしなければ、意識と肉体とは刻々、異様な共喰いをはじめて僕の手への〈動き〉すなわち精神の運動をしめあげていつてしまうだろう。

虚無は否定の極限としては存在しえない。それはむしろ肯定の極限として解されるべきものである。

〈世界〉が、なにものかでありつづけるかぎり、ついに〈純粹〉はひとつの否定の質としてしかあらわれることはないだろう。

現実への密着は、通常それ自体としてそのようには意識化されない。したがって、かかる〈現実密着〉をそのものとして感覚するとすれば、それはかならず強烈な現実乖離の象となってくる。

ひとつのものを注視すると、それは、ほんらいのそれとは全く別のものになってしまう。
ひとつの思考を、ひとつの比喻をもつて表現するのは、厳密に云えば虚偽である。

ひとの思想に依って思考せぬ、ということは、みずからの思考に依って発見ないしは獲得したものに、毛の筋ほどにも、〈普遍〉の感覚をゆるさないことである。

いかなる言葉も無益に通用してしまう。ほんとうに通じにくい言葉は、しかしどこにあるはずだ。

ものを区別する、とはもつとも基本的な把握―理解の遣り方であるが、それは〈ひと〉がする、〈世界〉への最小限度の妥協をも意味している。

区別されえぬものはしかしかならず消滅する。すなわち、区別される。

（言われたものにはあたかも臓腑のような構造を負わせ、それを言う僕そのものをはるかに外延化してしまえ。）

現実のもつとも遠いところから〈私〉を直撃する。そんなとき〈私〉もしくは現実は、ひとつの巨きな夢となる。

そして僕のうちに、なんとあの〈他者〉がおもわれていることだろう。

後記（読者へ）

これは一九七〇年の終わりから翌年の半ば頃までの間に私のノートに書きつけられた文章へ修正をほどこしたものである。

私は、一九六九年前後にその頂点をみた、おおかれすくなかれ私たちがうけとめざるを得なかったところの、一種独特の現実喪失、観念の解体の状況に、ある〈形態〉をあたえたいとおもった。そうしてそのことは、私たちの体験をひとつの時代の意味へとつなげてゆくべき回路をみいだすことの端初でもあるはずだ……………。

このため、私は、さまざまに語られる〈現実〉からかぎりなくはなれてゆかなければならなかった。そのことは是非は問わないことにしておく。とまれ、一九六九年以後の時期に、広範なかたちであらわれた〈解体〉を、どのような仕方にもせよ、うけとめざるを得なかったもののうちのひとりであるたとえば〈私〉がこのようなすがたで在りつづけた〈部屋〉からの、これは一個の報告書である。

一九七二年二月

作者

〈付記 収録詩篇について〉

『歩行に関する仮説的なノート』（一九七二年・私家版）から全篇。

倉田良成（くらた よしなり）

一九五三年、神奈川県川崎市に生まれる。

詩集に、『歩行に関する仮説的なノート』（一九七二年）、『早魃の想い出から』（一九七七年）、『ゼノン、あなたは正しい』（一九九五年）、『海に沿う街』（一九九八年）、『六角橋ストリート・ブルース』（二〇〇〇年）、『東京ボエーム抄』（二〇〇七年）、『小倉風体抄』（二〇一一年）、『グラベア樹林篇』（二〇一二年）、『横浜エスキス』（二〇一三年）など。ほかに、『ささくれた心の滋養に、絵・音・言葉をほんの一滴』（二〇〇六年）、『楠的思考―具体性の詩学』（二〇一二年）など。

* この「詩の図書館」内のあらゆる画像や文章などの情報を

無断転載することは著作権侵害にあたる行為のため禁止します。